

御義口伝 (合掌のこと)

御義口伝に云はく、**合掌**とは法華經の異名なり。向仏とは法華經に値ひ奉るを云ふなり。合掌は色法なり、向仏は心法なり。色心二法妙法と開悟するを歡喜踊躍と説くなり。合掌に於て又二の意之有り。合とは妙なり、掌とは法なり。又云はく、合とは妙法蓮華經なり、掌とは廿八品なり。又云はく、合とは九界、掌とは仏界なり。九界は權、仏界は実なり。妙樂大師の云はく「九界を權と為し仏界を實と為す」と。十界悉く合掌の二字に納まつて森羅三千の諸法合掌に非ざることを莫きなり。(一七三四頁)

現代語訳―御義口伝には、次ぎのように仰せである。「合掌」とは法華經の異名(本来の呼び方以外の名称。別名)である。「向仏」とは、妙法蓮華經に^いあいたてまつるということである。合掌は、色法の姿であり、向仏とは信心であり、心法である。色心の二法を妙法蓮華經であると開悟するのを、譬喩品で、舍利弗が歡喜踊躍したと説くのであり、歡喜踊躍とは心法色法一体の姿なのである。合掌において、また二つの意味がある。合とは「妙」であり、掌とは「法」である。また、合とは、妙法蓮華經であり、掌とは、それを開いた二十八品である。また、合とは九界であり、掌とは仏界である。九界は權、仏界は実である。妙樂大師は「九界を權となし、仏界を實となす」といつている。かくして、十界はことごとく合掌の二字の中に納まつており、森羅三千のあらゆる現象は、合掌の当体でないものはないのであります。

本日は三月度の御経日に当たりまして只今は皆様方と読経・唱題申し上げ、只今は各家先祖代々の靈・諸精靈の靈の追善供養をお申し出の塔婆を建立して懇ろに申し上げた次第であります。物故いたされた方々も皆様方の真心からの御供養に^さまじく満足ご嘉納の御事と拝する次第であります。ところで、私達は毎日の朝夕の勤行をする時、御本尊様に向かつて胸の前で手を合わせます。これを「合掌」といいます。合掌とは「掌を合わせる」という意味です。これは仏様を尊敬し、拜む時に用いられる最高の礼儀なのです。

皆さんが唱えているお経の中にも「皆一心に合掌」したと説かれています。そして、日蓮大聖人様も御書の中に「仏の教えを求める心が合掌という姿としてあらわれる」と教えられています。

ですから、合掌は、正座をして背筋を伸ばして両ひじを両わきにつけます。そして、自然な姿勢で胸の前で**両方の掌と指と指を合わせます**。これを、「合掌又手(合掌すること)」と言います。又、この右と左の両の指を合わせることに、これは両手の十本の指ついては、総本山第五十九世の堀日亨上人が書かれた富士宗学要集の化儀秘訣という書の中に「十指は十界なり」と書かれていますように、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覺・菩薩・仏の十界の生命を表し、その十本の指を合わせることによって、私たちの生命の中に十界のすべてが具わっていて、成仏(幸せになること)できることを表していると言われています。

ですから勤行の時には、目を閉じたり、キョロキョロしたりしないで、しっかりと御本尊様を見つめて正しい合掌の姿をしましょう。

私たちの毎日の生活には辛いことや苦しいことが満ちあふれています。朝、夕の勤行を続けていけば、それを乗り越えていける勇氣とやる気が湧いてきます。そして、梵天、帝釈天、日月天、四天王、八幡大菩薩という、御本尊様に認めてある、仏法上のあらゆる神様、これを諸天善神と言いますが、皆んなを昼も夜も働かして、色々な悩みや苦しみを解決できるように手助けしたり守ってくれたりするのです。

この諸天善神はお題目の声を聞いて、皆さん方を守る働きが盛んになります。大聖人は平左衛門尉頼綱への御状に（三七三頁）「一乗妙法蓮華経は諸仏正覚の極理、諸天善神の威食なり（一乗妙法蓮華経、即ち法華経は一切の仏が悟りを開いた極理であり、一切の善神の威光を倍增させる法味である）」と仰せになっています。つまり、南無妙法蓮華経は仏様が悟られた究極の真理でありますから、このお題目を味合うことによって、諸天善神は守護する威力が増すという意味です。ですから、朝の初座の勤行は諸天善神を拜むのではなく、南無妙法蓮華経の法味を送るために行うのです。そして、諸天善神の働きは一人一人の信心の強弱によって決まってくると説かれています。大聖人は四金吾殿御返事（一二九二頁）に「『必ず心の固きに返つて神の守り則ち強し』云云。神の護ると申すも人の心つよきによるとみえて候（『必ず心が堅固であつてこそ諸天善神の守護も厚い』とあります。これは諸天善神の守護といつても、人の心が強いことに依ることである。）」と述べられています。どういう意味かと言いますと、御本尊様への信心を一生懸命に頑張つて勤行・唱題に励む人を諸天善神は守ってくれるという意味です。物質文明の発達で、ともすると心の豊かさも失われてしまいかねない現代、「合掌できる心」ということが求められている世の中になっています。

特定の信仰の有る無しにかかわらず、誰にあつても日常の動作を止めて合掌をしますと、不思議なことに何となく安らかな気持ちが起こってくるものです。合掌の「掌」の字は「たなごころ」と読みますが、もともと「手の心」が変化して「たなごころ」となったものです。赤ちゃんが何でも手（掌）に握つて物を覚えるのも、また身の不調を訴える子供の額に、母親が手のひらを当てて様子を見るのも、掌（手のひら）にそれだけ微妙な感觸を吸収できる力用が具っているからでありましょう。「手のごころ」と捉えた古人は素晴らしいと思われまふ。

西洋人は握手を交わし、そこに相手の心を感じます。しかし片手が空いており、いつでも相手の態度の変化に対応できますから、完全に心を許した姿ではないと指摘する人もいます。一方日本人同士の挨拶には会釈があります。しかし仏教徒の三宝に対する礼法としては、合掌が用いられます。合掌は両手を封じ、加えて頭を垂れる礼拝でありますので、全くの恭順・帰依の意思表示となり、当然会釈よりも丁寧な拝礼作法となります。合掌は正しくは「合掌印」といいます。世間では印鑑をもって真実であり虚偽

の無いことの証明にしますが、仏教では諸仏菩薩が自らの境地・誓願を手・指等で表示するものとして、合掌も印の一種に数えられています。

日蓮大聖人様は真言見聞(六一二頁)に「其の上法華経には『為説実相印』と説いて、合掌の印之有り。譬喩品には『我が此の法印は世間を利益せんと欲するが為の故に説く』云云(そのうえ法華経方便品には「為に実相の印を説く」とあつて合掌の印が説かれていますし、また法華経の譬喩品には「我が此の法印は、世間を利益せんと、欲するが為の故に説く」とあつて法印が説かれていると述べられている)」と説かれております。

即ち、大聖人の御法門では合掌印とは諸法実相を顕わす旗印と理解することができま^す。また本宗中古に成つた「化儀秘訣」には「万法惣持(よく総てのものをおさめ持つて忘れ去らないもの、という意味)の妙法を表わす惣印(種々の印契の中で合掌は印契を総括したものであるということ。印契とは仏や修行者がつくる特定の手や指の形をいい、また本尊に向かつて合掌するの印契)」と説明されています。

真言宗では、十指を交差させたり、隣の指との間を空けたり、両掌の間に空間を作つたりといった、さまざまな印相を用いておりますが、日速正宗にあつては当然ながら合掌印のみを用います。他宗の印相(印契とも密印ともいう)と、はっきり区別するためにも、合掌印は正しい形をとらなくてはなりません。両掌を合わせ、指は力を入れない自然な形で真つすぐに伸ばすことが大切で、それによつて心の乱れもなくなり、一心不乱の意義が現れるのであります。

法華経には、不^レ輕菩薩が合掌礼拝をもつて時の衆生の仏性を拝んだこと、また「合掌向仏」「一心合掌」「合掌をもつて敬心し、具足の道を聞かんと欲す」「恭敬合掌して礼し」等と諸声聞・諸菩薩の姿が説かれ、合掌は法華経の中にもよく出てまいります。

御義口伝(一七三四頁)には「合掌とは法華経の異名なり」とあります。

次下では、色心・妙法・仏界九界をそれぞれ合と掌に配され、「十界悉く合掌の二字に納まつて森羅三千の諸法合掌に非ざること莫きなり」(同)等と説かれております。これは上掲した「真言見聞」の、「合掌印は諸法実相の印」との御文と軌を一(立場や方向を同じくする)にする御教示であります。

更に「合掌の二字に法界を尽したるなり。地獄・餓鬼の己々の当体其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり」(同)とのご教示には、九界の我々衆生が信の一念で合掌し御本尊に向かう(向仏)ところ、十界互具・事の一念三千、即身成仏の当体となるとの御意が拝せられます。信心の心を起こさずして、決して合掌はできないものです。ですから合掌向仏ができるということは、「即起合掌は身の領解と名く(即起合掌、即ち起ちて合掌しと読む、これは領解の形が外に振る舞いとして身形に表れたものであり、身の領解と名づけるのである)」「(同)とありますように自分自身が迷いの衆生、意思の弱い凡夫であることを知つて、謙虚になれたという現れであります。その心から御本尊に南無し奉るところに九界即仏界の意義が具わるのですから、合掌向仏して唱題する我々の姿は、成仏してい

る当体そのものを表わしているのであります。

以上の意義の上から、合掌の表わす意味を当宗では次のように説かれています。我々の一心は八葉の蓮華であり、心蓮または白蓮華ともいいます。これは仏性のことで、合掌はこの八葉を八本の指で形どり、残った二本の親指は父母、または境智・定慧を表します。また十指は十界三千で、これを合わせるところ十界互具となります。そして胸に当てれば心性の白蓮華（一念）に通じ、色心二法合して題目を唱え出すところ、三業即無作三身、事行の一念三千、当体蓮華仏であると説かれております。

合掌の意義については以上述べた通りですが、大切なことはやはり日常の勤行・唱題の折に、正しい合掌ができるかということです。最初は正しい合掌でも、次第に力が抜かれて指先が曲がったり、十指が合わなくなったり、また逆にあまり力を入れすぎて脇下が開いてしまったり、掌の位置が胸より下がったりと、合掌になっていない人をよく見かけます。正座・腹底からの発声、そして視線の位置を御本尊の妙の一字に定めることも正しい合掌の要件で、かくして事の一念三千・妙法の当体蓮華仏となるのですから、日常から正しい姿勢がとれるよう心掛けておきたいものです。

最後に、勤行以外でも御法主上人への拝礼も合掌に限ります。また御書拝読の前後、食前食後等にも自然に合掌ができるようにいたしましょう。以上。

（令和六年三月度・御経日の砌）